

マーケティングにおける参与と対話の方法

武井 寿

一序

われわれは、これまでマーケティング・コミュニケーションのなかでの消費者行動を研究対象として、行為者の立場に即して解釈し、理解することによって、より深い次元で探究するための理論と方法について考察をおこなってきた⁽¹⁾。そして、現象のインサイドに接近し、消費者への面接の実施や、生活史の分析などを通じて厚い記述 (thick description) を作成し、行動の本質的意味を説明しようと努めることが必要であることを指摘した。一九八〇年代以降の消費者行動研究は、人間としての消費者の感情的側面への注目などによって、ヒューマニスティック・アプローチと呼べる新しい展開を導入し、研究方法の多様化を促進した。それらは、社会学、人類学、精神医学などに基礎をおくものである。そして、現象を

当事者の視点で深く知り、再構成をはかるためには、現象に研究者が積極的に参与すべきこと、ならびに「聴く」ことを中心として対話 (ダイアローグ) を交す必要があることを明らかにした。

こうした動向は脱実証主義と呼べる現代の科学哲学の潮流と軌を一にするものであって、マーケティング研究への現象学的アプローチ、ナチュラリスティック・インクワイアリーなどと称される。S. D. Hunt はマーケティング研究における相対主義的認識の進展は「真理」の意味を改めて問うものであることを指摘した⁽²⁾。また、新しいアプローチは社会科学を自然科学と人文科学の中間に位置づけることによって、人間探究への独自の道を拓く特色がある。本稿では、客観的視点と素朴な主観主義の総合による客観的主観性 (objectively subjective) の可能性を探った P. Reason = J. Rowan の文献⁽³⁾により、

ニュー・パラダイム・リサーチの特色、参与的研究の類型、新しい知の方法論などについて説明したい。また、消費者の日常体験を面接を通じて記述し、そのなかから生きた意味を捉えようとする実存主義的現象学 (existential-phenomenology) のアプローチを C. J. Thompson = W. B. Locander = H. R. Pollio の研究により検討したい。

つぎに、参与的研究の体系を D. L. Jorgensen の研究⁽⁵⁾によって考察したい。社会学者である著者の記述に従い、観察と記録を中心とした参与観察 (participant observation) の方法について説明する。

また、対話の意義と方法についてさらに深く検討したい。対話は問答という形式でギリシャの昔より発達し、多くの哲学者の関心を集めてきたことは周知のとおりである。そこで、本稿では金子晴勇⁽⁶⁾、島崎隆らの研究に依拠することによって、その概念や方法を探り、つぎに、独自の思索として知られる M. Buber の著作⁽⁸⁾、ならびに精神医学者である神田橋條治の研究などに依拠し、対話の本質的要素について考察したい。さらに、有馬道子の研究⁽¹⁰⁾などを参考としながら、情報や解釈に対する研究者の態度や方法についても検討を加えたい。

以上のように、本稿は消費者の「生」の本質をホリスティックに理解するための方法の多様化の可能性を、社

会学、組織論、哲学、精神医学などに依拠し検討することによって、人間を中心としたマーケティング研究の新たな規範を考察することを目的とする。

注

- (1) 拙著『現代マーケティング・コミュニケーション』白桃書房、一九八八年。拙稿「マーケティングにおける「消費者研究」の新潮流」大分大学経済論集、第四〇巻第三号、一九八八年九月。拙稿「マーケティング研究における知識生成の方法—解釈主義の台頭—」大分大学経済論集、第四〇巻第六号、一九八九年二月。拙稿「マーケティング研究への解釈学のアプローチ」日経広告研究所報一二九号、一九九〇年二月。拙稿「マーケティングにおける「理解」研究の方法論的考察」神奈川大学国際経営論集、第一号、一九九〇年三月。拙稿「マーケティングにおける「解釈」研究の理論と方法」神奈川大学国際経営論集、第二号、一九九一年三月。拙稿「聴く」との理論と方法—社会現象の解釈学的探究—」神奈川大学国際経営フォーラム、第二号、一九九一年三月。
- (2) Shelby D. Hunt, "Truth in Marketing Theory and Research," *Journal of Marketing*, July 1990, pp. 1-15.
- (3) Peter Reason and John Rowan (eds.), *Human Inquiry*, John Wiley & Sons Ltd., 1981.
- (4) Craig J. Thompson, William B. Locander, and Howard R. Pollio, "Putting Consumer Experience Back into Consumer Research: The Philosophy and

Method of Existential-Phenomenology," *Journal of Consumer Research*, September 1989, pp. 133-145; C. J. Thompson, W. B. Locander, and H. R. Pollio, "The Lived Meaning of Free Choice: An Existential-Phenomenological Description of Everyday Consumer Experiences of Contemporary Married Women," *Journal of Consumer Research*, December 1990, pp. 346-361.

(5) Danny L. Jorgensen, *Participant Observation*, Sage Publications, Inc., 1989.

(6) 金子晴勇『対話的思考』創文社、一九七六年。

(7) 島崎隆『対話の哲学』みすず書房、一九八八年。

(8) Martin Buber, *ICH UND DU, ZWIESPRACHE* (田口義弘訳『我と汝・対話』みすず書房、一九七八年。)

(9) 神田橋條治『精神療法面接のコツ』岩崎学術出版社、一九九〇年。

(10) 有馬道子『心のかたち・文化のかたち』勁草書房、一九九〇年。

二 ニュー・パラダイム・リサーチ

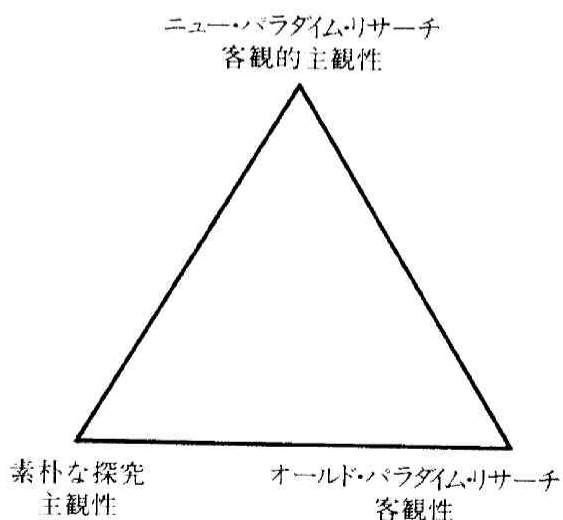
(一) 客観的主観性

近年の学問の方法論のあり方を論じた代表的研究のひとつが P. Reason = J. Rowan の文献⁽¹⁾であった。これは、

正統的と考えられてきたアプローチに代わりうる人間探究 (human inquiry) の方法を探る目的で設けられたニュー・パラダイム・リサーチ・グループの研究であり、心理学、社会学、経済学、政治学、人類学、精神医学、教育学などの異なる専門領域の研究者を結集することによって、新たな方法の可能性を検討した。そのなかから、客観性を重視する既存のサイエンスの枠組みと、素朴な主観性を総合した客観的主観性 (objectively subjective) の方法論が提起された (図1参照)。

ニュー・パラダイム・リサーチの「正統派的慣行 (orthodoxy)」に対する批判はつぎのポイントに集約できる。(1)人間が社会的文脈から分離され操作単位とし

図1 ニュー・パラダイム・リサーチ



(出典) P. Reason and J. Rowan (eds.), *Human Inquiry*, John Wiley & Sons Ltd., 1981, Foreword, xiii.

て扱われる、(2)人間を一群の変数に還元する、(3)還元主義は深い理解や全体としての認識を妨げる、(4)測定結果のみを真理と考える、(5)少ないサンプルによる一般化を行いがちである、(6)決定論に依拠することにより実験者と対象の間に威圧的(主従の)関係が醸成される⁽²⁾。

Rowan = Reason によれば、西欧文化の知の方法論に最も大きな影響を与えたのは分析科学の論理であった。

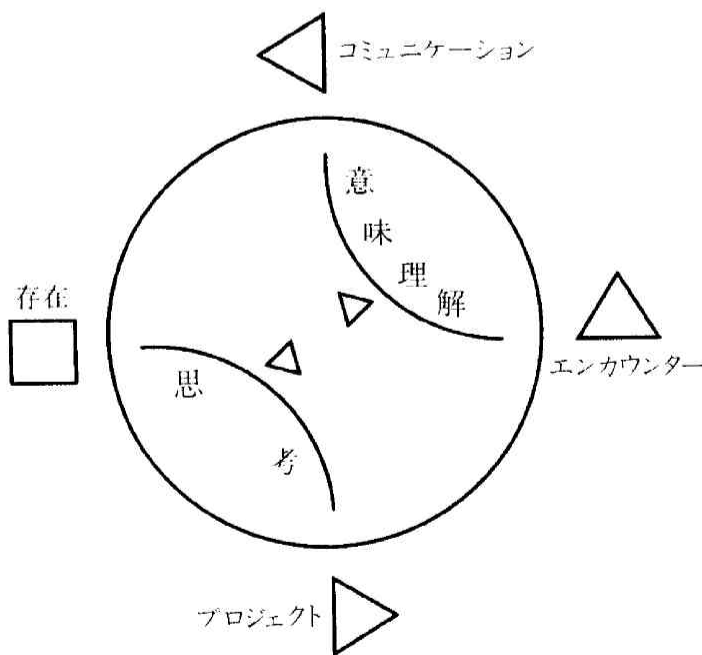
これは Aristoteles の矛盾律 (law of contradiction) と排中律 (law of excluded middle) の二つの原理に基づいている。前者は、ある命題が真実であると同時に偽りであることはないこと、後者は、すべての命題は真実か偽りのどちらかであり、中間的なものは存在しないことを意味する。これらに、Hume や Mill などの因果性に基づく決定論的思考が加えられて、正確さ、精密さ、因果法則、ヒエラルキーなどを中心とした今日のサイエンスの方法論が確立した⁽³⁾。

これに対して、Rowan = Reason はつぎの分野がニュー・パラダイムのルーツであることを指摘した。①人間主義的心理学 (Maslow) ②臨床心理学 (Roger, Jung, Sullivan, Freud) ③現象学、エスノメソドロジー、参与観察、④組織行動論、組織開発 (Argyris) プロセス・コンサルテーション (Schein) ⑤マルクス主義、⑥実存主義、⑦弁証法⁽⁴⁾。

(二) 体験的研究

Rowan によれば、研究はつぎのサイクルによって構成される(図2参照)。研究者が特定の領域に取り組み、問題を発見する(存在)。文献探査により過去の研究を知り、情報を結合し、問題をたて直す(思考)。リサーチ・プランをデザインし、仲間と協議する(プロジェクト)。実験、サーベイ、観察を実施する(エンカウンター)。データ処理、コンテンツ・アナリシス、統計的操作

図2 研究のサイクル・モデル

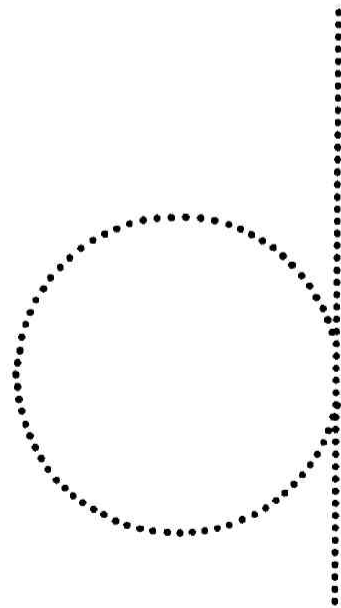


(出典) J. Rowan, "A dialectical paradigm for research," in P. Reason and J. Rowan, *op. cit.*, p. 98.

を行う(意味理解)。結果を論文としてまとめ、発表する(コミュニケーション)。フィールドにおける通常の仕事に戻る(存在⁽⁵⁾)。

以上の流れを基礎に研究の類型を示せばつぎのものを指摘できる⁽⁶⁾。点線が疎外(alienation)、すなわち人間を研究対象としての断片と考える状況を表現すると仮定する。図3において、円は研究者を表わし、直線は対象が研究者と一点でのみ出会う(エンカウンター)ことを意味している。これは純粹基礎研究(pure basic research)のパターンである。人間対人間の出会いというよりは、役割を通じた疎外されたエンカウンターが実現している。つぎに、研究者と対象が同様に一点で会うが、非疎外的で、真正の(authentic)関係が成立するパターンがある。これを実存的研究(existential research)と呼ぶ(図4参照)。また、破線が状況に応じた疎外の有無を表現するとすれば、図5はアクション・リサーチ(action research)、介入研究(intervention research)、パーソナル・コンストラクト・リサーチ(personal construct research)のパターンである。研究者は対象とプロジェクト、エンカウンター、コミュニケーションの三段階で接触する可能性がある。研究者が関与を十分に深め、対象が役割に隠れないようにするパターンがある。体験的研究(experiential research)、内

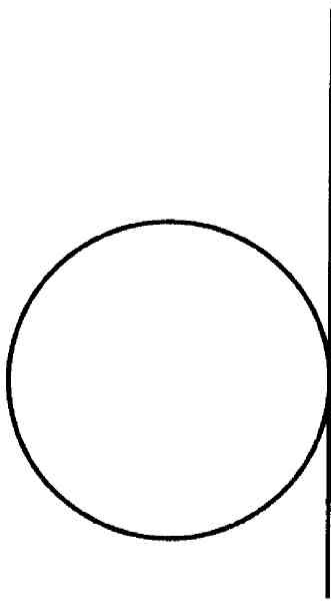
図3 純粹基礎研究



生的研究(endogenous research)、参与的研究(participatory research)などと呼ばれる一群である(図6参照)。相互信頼の文脈のなかで、支持と対立が発生するため、最も変化志向的な方法といえる。

以上のなかで、体験的研究は研究者が現象に対象と同

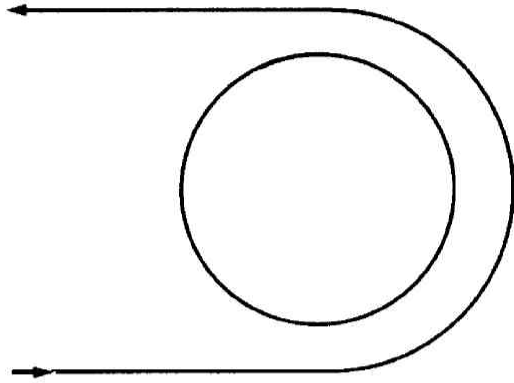
図4 実存的研究



(出典) J. Rowan, *op. cit.*, p. 101.

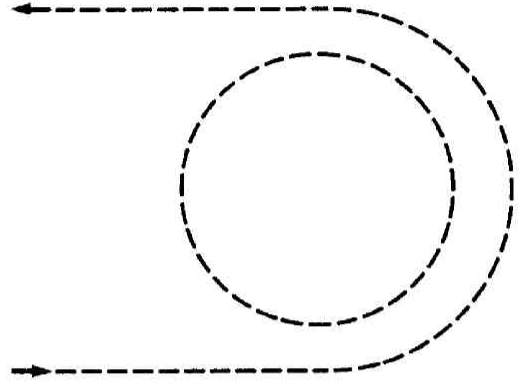
(出典) J. Rowan, *op. cit.*, p. 102

図6 参与的研究



(出典) J. Rowan, *op. cit.*, p. 103.

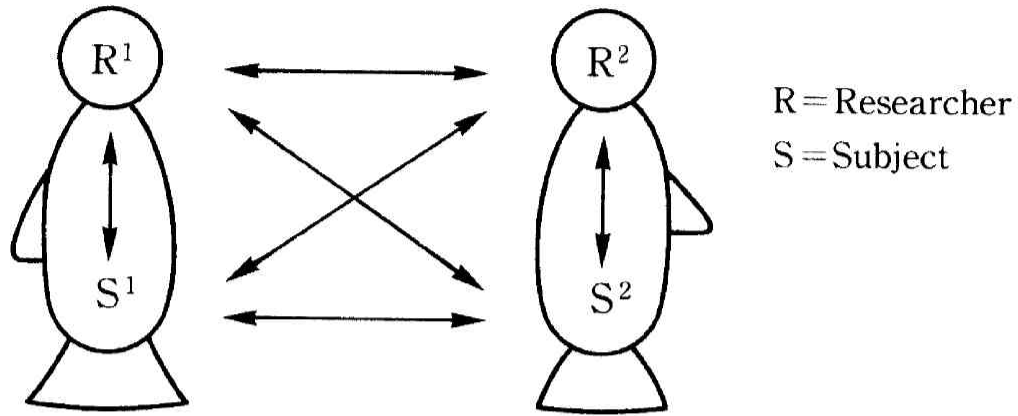
図5 アクション・リサーチ



(出典) J. Rowan, *op. cit.*, p. 102.

じく参与し、相互作用のなかから考察を進める方式として注目できる。⁽⁷⁾ 伝統的モデルのなかでは研究者と対象は非互恵的で、非対称的關係にあると考えられてきた。研究者は仮説やリサーチ・デザインに従って対象に指示を与え、対象はそれらに関して相談されたり情報を与えられることはない。こうした関係を前提に対象がどのように指示を実施するかを知ることが、人間関係や対象自身を知ることよりも重要とみなされる。すなわち研究者は知識にコミットするのであって、人間にコミットすることはない。このように研究者は対象に影響を与えるが、逆の關係は存在しない。これに対して、体験的研究では、研究に参与する人間が研究者で同時に対象ともなる關係が生ずる。各人は自己の体験と行為を通じて、また、他人の体験と行為によって仮説を探究するといえる。こうした關係は図7によって表現される。内面的および相互的關係を包摂した六方向（アイデアの交換、体験のエンカウンター、個人および相互間でのアイデアと体験の双方向の調整的相互作用）で互恵的關係を指摘することができる。したがって、研究の段階はつぎのように区分できる。(1)初期の研究命題の討議と仮説への同意、(2)研究の実施と仮説の検討、(3)共同のエンカウンターならびに体験による体験知の獲得、(4)命題の再検討と結論の定式化。

図7 体験的研究



(出典) J. Heron, "Experiential research methodology,"
in P. Reason and J. Rowan (eds.), *op. cit.*, p. 155.

以上より、知識はつぎのように類型化できる。(1)命題の形で述べられる事実や真実の知識としての命題知 (propositional knowledge)。これは完全に言語依存的 (language-dependent) である。(2)特別な技能の習得のごとき実用知 (practical knowledge)。(3)直接的対面による体験知 (experiential knowledge)。既述の研究段階の第1および第4段階は命題知、第2段階は実用知、第3段階は体験知の領域である。Heronによれば、成果としてのサイエンスは命題知を中心として成立するが、探究のプロセスとしてのサイエンスは他の知識を包摂することを忘れてはならない。

Rowan = Reason によれば、伝統的なサイエンスでは意味 (meaning) について考察することはない。サイエンスは物質界の現象の意味を発見しようとすることを止め、現象を経験的に探究し始めてから発達したといえる。しかし人間の体験を考察する際には意味を避けて通ることとはできない。このために解釈的方法を用いることができる。体験を考察の対象とする場合には、客観的理解や解釈といったものと、歴史のある時点で世界を共有している人間にとって間主観的に成りたつ解釈を識別しなければならぬ⁽⁸⁾。

(三) 参与的研究

つぎに、参与的研究の方法について検討したい。

ノルウェーの M. Elden⁹⁾ はリサーチ・デザインの意思決定をつぎのように分類し、研究に直接影響される人間がこれらの決定に影響を与え、実施に関与する研究を参与的と呼ぶことができるかと定義した。ノルウェーでは労働環境の民主的改革のための議論が活発に行われ、そのための法律 (quality work life law) が一九七七年に成立した。この過程において参与的研究方法が利用された社会的背景がある。したがって Elden の言う参与者とは従業員、意味ある参与とは意思決定ならびに実施にインパクトを与えるだけの十分な関与と影響力を意味する。影響力の有無と四つの意思決定の組み合わせから表1のようなマトリックスをつくることができる。そして、これを基礎にしてリサーチ・デザインの四類型を明らかにできる (A、B、C、D)。A および D タイプは純粹研究である。A タイプは基礎的・学術的研究であって、コンテクストにとらわれない知識の開発を行う。D タイプは従業員主導の組織変革のためのコンテクストを前提とした知識 (ローカル・セオリー) をつくる可能性がある。C タイプは多様な問題領域で広く活用されるものであり、応用研究 (applied research) と呼ぶことができる。B タイプは成果の利用可能性がなく現実的ではない。以上を体系的に示したものが表2である。

表1 リサーチタイプ別の参与者の影響

		参与者が影響する意思決定			
リサーチタイプ		問題の定義	方法の選択	データ分析	発見事項
A	1	0	0	0	0
B	2	1	0	0	0
	3	1	1	0	0
	4	1	1	1	0
	5	0	1	1	0
	6	1	0	1	0
C	7	0	1	1	1
	8	1	0	0	1
	9	0	0	0	1
	10	0	0	1	1
	11	1	0	1	1
D	12	1	1	1	1

0=影響無し, 1=影響有り

(出典) M. Elden, "Sharing the research work : participative research and its role demand," in P. Reason and J. Rowan (eds.), *op. cit.*, p. 258.

このように参与的研究にはいくつかの類型がある。金井壽宏は組織論の E. H. Schein の研究を引用しつつ、定性的研究方法を臨床的アプローチ (C モード) と民俗誌的アプローチ (E モード) に分類した¹⁰⁾。これは参与的研究の類型を知るうえでも有効な分類である。C モードと

表2 異なるリサーチタイプ (職場研究)

	リサーチタイプ		
	Aタイプ (基礎研究)	Cタイプ (応用研究)	Dタイプ (参与的研究)
研究目標	抽象的一般知識 (コンテキストにと らわれない知識)	職場の問題への解答 (コンテキストと 関連した知識)	行為可能で一般化可能 なローカル・セオリー (コンテキストと関連 した知識)
受益者	研究者	クライアント (経営者)	参与者 (従業員と研究者)
データ提供者 の成果利用の 可能性	極めて低い	低い	高い
研究者と対象 の関係	理論家 ↓ 対象	専門家 ↓ クライアント	同僚 ↓ 同僚
研究者の役割	距離をおいた 学習の生産者	組織変革の 生産者	学習の共同 生産者

(出典) M. Elden, *op. cit.*, p. 263.

は依頼人(クライアント)の問題に対する診断と解決を試みる方式であり、病理的側面を重視した深いデータの収集を行う。一方、Eモードは研究者の側から調査を依頼し、研究上の焦点を重視しながら内部者の考えを教わることを目的とした方式であり、聞くことへの徹底という特徴がある。このように、参与的研究には、参与し観察することを目的とする方式と、参与し変化を誘発することを目的とする方式がある。

Reason = Rowan はニュー・パラダイム・リサーチの知の方法論の特色をつぎのように要約した。(1)人間についての重要な知識は研究者と対象の互恵的關係のなかからつくられる、(2)研究者と対象の共有言語と慣習が対象世界を創造する、(3)人間の自律的行動を強化するような知の創造をはかる、(4)知識そのものではなく、生活のなかで人間が知を獲得するプロセスこそが重要と考える、(5)主観性と客観性の総合を目的とする、(6)状況の個別性を重視し、曖昧さ、矛盾、印象を包摂することによって暗黙的理解や現象学的正確さを強調する、(7)最もパーソナルで個別的なものが最も一般的であると考えて、個が存在する一般的パターンを記述する、(8)文脈のなかの人間を全体として捉えることによって深みのある多角的理解をはかる、(9)人間をモノ(things)ではなくヒト(people)と考える、(10)知識は力であり研究を中立的性格のもの

のとは考えない⁽¹¹⁾。

(四) 消費体験の探究

マーケティング研究においては、消費体験を実存的現象学 (existential-phenomenology) の哲学と方法によって洞察し、体験の「生きた意味 (lived meaning)」を把握しようとする試み⁽¹²⁾が Thompson = Locander = Pollio によって進められている。

実存的現象学は実存主義 (existentialism) と現象学 (phenomenology) の方法を融合した学問的立場である。人間を非二元論的観点から考察し、体験をコンテクストとホリスティックな視点を重視しながら一人称で記述しようとする特色があり、方法的にはつぎの二つの領域に関係が深い。①ゲシュタルト心理学、②臨床実践。Thompson らは異なるパースペクティブからの世界観を比較すべく仮説を説明するメタファー (metaphor) の分析をおこなった。論理実証主義、合理主義、あるいはデカルト哲学とも呼ばれる伝統的研究のメタファーはつぎの二点に要約される。①機械メタファー (machine metaphor)、②容器メタファー (container metaphor)。前者は対象を機械と仮定し、システムのあらゆる動力学が原理と法則のもとに働くとみなす方法である。これによってつぎのようなサイエンスの規範が導き出さ

れる。(1)サイエンスは公式の言語体系(数学および操作的用語)を使用する、(2)因果法則を明示する、(3)分析的手法を用いる、(4)現象を必要十分な一群の特性に還元する。一方、後者は、体を心の容器、心を概念作用の容器とたとえることによって、心身二元論(dualism)を意味する。そして、人間の認識活動についてつぎのごとく主張する。(1)身体の外側で発生する外的事象は客観的であり、内的事象は主観的である、(2)心は外部世界を表わす象徴(シンボル)を操作する実体であり、こうした操作によって外部世界は内部意識のなかにもちこまれる。シンボル操作の認識過程は内部的であるので、その構造や機能はコンテクストとは無関係に研究できる、(3)対象は体験とは無関係の現実として存在しており、数学的に正確で言語的曖昧さのない真実の記述がある。

一方、実存的現象学のメタファーはつぎのポイントに要約できる。第一にパターンメタファー (pattern metaphor) がある。知覚的には区別可能であってもパターンは取りまくコンテクストから独立的に存在することはない。同様に人間を環境から切り離さずにコンテクストのなかで捉えることが必要である。こうして、体験をコンテクストのなかで発生するものとして、いわば「生きたもの (lived)」として記述する。第二に図と地のメタファー (figure/ground metaphor) がある。描かれた絵の

ある部分を図と見れば残りの部分は背景(地)と映る。

このように、あるパースペクティブからみて図であるものも別のパースペクティブでは地となる場合がある。それゆえつぎの三つのポイントを指摘できる。(1)体験は図と地の原則のごとく生活世界におけるダイナミック・プロセスである、(2)図と地は両者で一体である、(3)思考、感情、知識、イメージ、想起は焦点のある意図的現象である。このように、体験は文脈から切り離すことができない。すなわち、完全な主観性として「内部」に位置づけることも、主観性を離れたものとして「外部」に位置づけることも適切ではない。第三に視覚メタファアト(seeing metaphor)がある。体験には、映し出されたもの(reflected)と映し出されないもの(unreflected)があり、過去の先行条件で現在の問題が発生したのではなく、現在の生活世界の実存的選択が現象をつくると考えるべきである。

消費者研究への両者のアプローチを比較すれば表3のとおりである。

実存的現象学に基づく研究の展開において中心となるのはつぎの概念である。第一に体験の志向性(intentionality)を考えることが必要である。体験の主体と対象をひとつの統一体と把握することによって、志向性を明らかにし、研究者の概念カテゴリーは体験に対して副

表3 消費者研究へのアプローチの比較

パラダイムの主義	実存的現象学	デカルト思想
世界観	コンテキスト中心	機械論的
存在のあり方	世界のなかに	二元論
研究の焦点	体験	理論的構造
研究のパースペクティブ	1人称	3人称
研究のロジック	定言的	予言的
研究の戦略	ホリスティック	構成要素的
研究の目標	主題(テーマ)記述	因果的還元主義

(出典) C. J. Thompson, W. B. Locander, and H. R. Pollio, "Putting Consumer Experience Back into Consumer Research: The Philosophy and Method of Existential-Phenomenology," *Journal of Consumer Research*, September 1989, p. 137.

次的存在であることを知らなければならぬ。生きた体験はそれが発生した特定の生活世界に関して理解されることが必要である。第二に自然な対話(emergent dialogue)がある。コンテキストを明らかにし、生きた体験を把握するためには対話の展開が不可欠であるが、対話の道筋は参与者によってつくられる。事前に作成した質

問を行うのではなく、面接の内容は関係者の協力によって構成すべきである。したがって対話の展開は事前に予測できない。第三に解釈 (hermeneutic endeavor) がある。現象の記述の解釈のために適切な方法を工夫しなければならぬ。解釈はテキストの部分と全体を反復的に検討することによって進行する。面接内容を解釈し、共通パターンを明らかにしながら解釈のコンテクストを拡張する。こうした共通性をテーマ (theme) と呼ぶ。解釈のパターンは他の読者に理解できるものでなければならぬが、テーマを唯一の解釈と考える必要はない。

(五) 現象学的面接

実存的現象学の考え方に即して現象学的面接 (phenomenological interview) が行われる¹³⁾。

現象学的面接は深層を探究するため知らされた同意 (informed consent) を必要とする。被面接者は研究の目的、および内容の録音を事前に伝えられる。また匿名性が確保される。そして研究のすべての段階で秘密が保持される。対話の流れはむしろ回答者がつくると考えるべきである。面接の意図は会話をつくることにあり、「質問—回答」の方式で進めるべきではない。

面接は体験について一人称の記述を得ることを目標とするため、面接者は回答者が体験を詳細に、自由に説明

できるコンテクストを提供すべきである。話題について面接者が回答者よりも知識をもっていると考えて面接を始めてはならない。焦点は被面接者の体験にあり、かかる意味で回答者を専門家とみなすべきである。質問はできるだけ具体的事象に関して行うべきである。こうすれば回答者は体験を詳細に、生きた形で説明することができ、「この製品はあなたにとってどのような意味がありますか」と尋ねるのではなく、「あなたはこの製品をいづごろ使いましたか」と問うべきである。このように質問は記述的性格をもつことが望ましい (「×はどのようなか」「あなたはその時どのように感じたか」。関連質問を行う場合には回答者自身の言葉を引用すると効果的である。質問で最も重要なことは「なぜ (why)」という問いを避けることである。こうした質問はつぎの二つの理由で生きた体験の記述を阻害する恐れがある。(1) 回答者が行為の合理化 (rationalization) を要請されていると感じて防衛的反応を示す、(2) 回答者が分析的立場で行為を説明する。

また、面接者は非指示的 (non-directive) な聞き手となって面接を進行させる。サイエンスの伝統では記述は理解の予備的段階であり、研究者は三人称のペースペクティブから現象を客観的に考察する。しかし実存的現象学は一人称で現象を記述する。三人称の記述の問題点は

つぎの二点に要約できる。(1)現象の質的差異や体験の内容が分らない、(2)理論的抽象を志向するため生きた体験をそのまま表わすことが難しい。

つぎに録音を筆記し、解釈の局面へ移行する。文字化された面接内容をテキスト (text) と呼ぶ。テキストへの依存はつぎのごとき規範を意味する。(1)解釈は回答者自身の言葉に依拠して行うべきである。研究者の言葉への移しかえは生きた体験の感覚を失わせる、(2)テキストは回答者の考えを反映したデータの自律的集合として扱うべきである。自律的 (autonomous) とはつぎの二点を示唆する。①回答者の記述を他の方法で検証しない、②解釈にテキストが与える証拠を越えた仮説、推論、憶測を交えない、(3)現象に関する先入的概念は括弧に入れて解釈を行うべきである。

また、解釈は複数の人間によって行う。必ずしも専門家でなくとも、解釈に十分な時間と活動を注ぐ意欲をもつ人間を集めることが必要である。メンバーは互いの解釈の前提を検討することによって「括弧入れ (bracketing)」を促進する。解釈は対話記録に戻って評価し、必要があれば追跡調査のための質問を行う。回答者の生きた体験を把握できたかどうかを知るために、対話のなかでの回答者自身の言葉が解釈を支持しているかどうかを確認する。また、解釈は部分と全体の関連づけを継続的

に行うプロセスであるため、対話記録の初期の部分を後半の部分に照らして評価し直す試みが常になされる。複数の人間での解釈はつぎの利点を享受できる。(1)広範なパースペクティブが新たなパターンの発見を促す、(2)作業の共有によって入念な検討が可能となる、(3)単独作業での単純さと不安を回避できる。

以上によって体験のなかの共通パターンを発見する。Thompsonらは主婦を対象とした面接調査から日常の買物の意味を知る試みをおこなった。面接の解釈によってつぎの三つのテーマが浮上してきた。これらのゲシュタルト的相互作用が自由な選択の意味を形成している。①選択の制約と自由、②選択の計画性と衝動性、③選択における感覚性と慎重さ。常識的には、制約がなく、計画性があり、慎重であることが自由な選択の意味とみなされるが、実際の消費体験のなかでは、主婦は正しい購買意思決定に対して十分な自信をもっているわけではなく、制約された状況や計画性を放棄したなかでこそ自由を感じるという矛盾した感想があるといえる。

注

- (1) P. Reason and J. Rowan (eds.), *Human Inquiry*, John Wiley & Sons Ltd., 1981.
- (2) *Ibid.*, Foreword.
- (3) J. Rowan and P. Reason, "On making sense," in

Ibid., pp. 113-137.

(4) *Ibid.*, Foreword.

(5) J. Rowan, "A dialectical paradigm for research," in *Ibid.*, pp. 93-112.

(6) *Ibid.*, pp. 101-103.

(7) 体験的研究についての説明はつぎのものを基づく。

John Heron, "Experiential research methodology," in *Ibid.*, pp. 153-166; J. Heron, "Philosophical basis for a new paradigm," in *Ibid.*, pp. 19-35.

(8) J. Rowan and P. Reason, "On making sense," in *Ibid.*, pp. 113-137.

(9) Max Elden, "Sharing the research work: participative research and its role demand," in *Ibid.*, pp. 253-266.

(10) 金井壽宏稿「経営組織論における臨床的アプローチと民俗誌的アプローチ」神戸大学国民経済雑誌、第一五九巻第一号、一九八九年、五五〜八五ページ。

(11) P. Reason and J. Rowan (eds.), *op. cit.*, Afterword.

(12) 本節の説明はつぎのものを基づく。

Craig J. Thompson, William B. Locander, and Howard R. Pollio, "Putting Consumer Experience Back into Consumer Research: The Philosophy and Method of Existential-Phenomenology," *Journal of Consumer Research*, September 1989, pp. 133-145; C.

J. Thompson, W. B. Locander, and H. R. Pollio, "The Lived Meaning of Free Choice: An Existential-Phenomenological Description of Everyday Consumer Experiences of Contemporary Married Women," *Journal of Consumer Research*, December 1990, pp. 346-361.

(13) 本節の説明はつぎのものを基づく。

Ibid.

三 参与観察の方法

(一) 特色

つぎに参与観察 (participant observation) の方法について社会学者の D. L. Jorgensen の研究⁽¹⁾に依拠しつつ説明したい。

参与観察は研究者が現象に参与することによって観察を行い、データを収集し、理論をつくる研究方法である。社会学や文化人類学を中心に用いられてきた。既述のようにマーケティングにおいても一九八〇年代の末期からこうした方法への関心が高まっている。Jorgensen⁽²⁾によれば参与観察はつぎのような場合に適切といえる。

(1) 現象について既知の内容が乏しい、(2) 内部者 (insider) と外部者 (outsider) で見解に重大な相違がある、(3) 現象が外部者からは分りにくい、(4) 現象が表面に現わ

れていない。

参与観察は日常生活の現実のなかから人間生活についての実践的かつ理論的真理を探究する方法である。そこで方法的特色としてつぎのようなポイントを指摘することができる。(1)内部者の視点を尊重する。日常生活において人間は現実世界に意味を与え、意味を基礎として相互作用することによって、個人としての現実をもつ。ネイティブ(native)、メンバーなどの内部者の現実には外部者は触れることができない。参与観察はこうした内部者の立場からみた人間存在の意味に焦点をあてる、(2)日常生活の世界から出発する。日常生活の世界とは、人間存在の、通常の、ありふれた、典型的な、ルーチンな、自然な環境である。実験やサーベイにおける人工的、操作的環境とは異質の対象を扱う、(3)人間存在の解釈と理解にポイントをおく。参与観察は解釈的理論(interpretative theories)と関係が深い。これは現象の説明、予測、統制を目的とするものではない、(4)開放的論理と探究プロセスを重視する。問題点は実際の研究背景から具体的に定義する。発見の論理に重点を置き、人間の現実を基礎をおいた理論を構築する。直接体験と、柔軟で開放的研究プロセスを重視する、(5)ケース・スタディを行う。参与観察は一般的にケース・スタディの形で行われ、個別の事例を詳細に記述し、分析する。現象のホリスティックな吟味を重視し、構成要素のコンテキストからの分離を避ける、(6)研究者は参与者となる。参与者は内部者の立場で日常生活に接近し、相互作用を体験し、観察する。関与を内部者に明らかにする様式(overt)と秘密裡に行う様式(covert)、ならびに特定の内部者に知らせる様式がある。したがって参与観察の成否のポイントはつぎの三点にある。①参与者、②フィールドの人間、③相互作用のコンテキスト、(7)直接観察(direct observation)を中心に情報を収集する。そのほか、新聞、手紙、日記、写真などを活用する。また情報提供者としてのインフォーマント(informant)を発見することが重要である。情報収集の方式は、日常会話、面接、アンケート調査などである。

(I) 日常生活への参与

つぎに日常生活への参与の原則と方法について説明したい。⁽⁴⁾

研究者の現象への位置が観察内容を決める。観察は人間の身体的所在(physical location)と社会的所在(social location)に依存し、観察の可能性、特質、および機会を定める。外部者には意味のない行為であっても、内部者には重要であるものも少なくない。身体的および社会的所在は対象となる現象へのパースペクティブを与え

る。しかも完璧な所在やパースペクティブはない。パースペクティブの適切さは対象としての問題によって変化する。どのようなパースペクティブも限界やバイアスをもっていることを知り、参与者は役割が観察を制限したり、促進することに注意を払う必要がある。それゆえ、研究者は異なる見方 (angle) とパースペクティブを不断に探究すべきである。

参与者の役割は完全な外部者 (complete outsider) から完全な内部者 (complete insider) までの連続体のうえに位置づけられる。研究者の見ることに、聞くことに、触れることに、味わうことに、おいをかぐことに、あるいは感じることは参与の程度に依存する。参与と観察は両立しないという考え方があつた。しかし、研究者は経験を積むことによってこれを克服できる。むしろ発見は日常生活に、直接に、個人的に、実存的に関与することで可能となると考えられる。研究者は主観的関与を通じて多くのパースペクティブから、人々の思考、感情、行動を直接に知ることができる。外部者としての参与 (状況のなかに存在する外部者) は現象の表面的特徴、関係、パターンなどを発見する。研究者の身分を明らかにして参与する方法は研究への集中を可能とし、倫理的問題を回避できる利点があるが、人々が通常とは異なる反応を示す欠点がある。参与の時間が長ければ長いほど、あるいは頻

繁であればあるほど、外部者の存在は自然なものと受けとめられる。

また、研究者が外部者として参与しながら内部者の問題に深く関与する方式がある。こうした場合には、完全な外部者よりも内部者の領域に一步踏みこんだ役割を担う。研究者はしばしば問題に対する専門的助言を期待される。すなわち参与し観察するだけでなく、問題に関与し解決に協力する方法である。人間の体験の深い意味は内部者の日常生活に同じ立場で参与してはじめて理解できる。内部者としての役割は環境によって与えられる。研究の進行にもなつて変化する。複数の役割を遂行することによって異なる観点やパースペクティブに触れることが可能となり、研究者は現象の包括的で正確な姿を把握できる。参与が深く浸透した段階において「現象になる (becoming the phenomenon)」という事態が発生する。かかる状況は主観性の支配という意味で学問的立場から批判されることもあるが、参与観察のポイントが内部者としての日常生活の体験にあるとすれば、そのために現象になり、現象を実存的に体験することが必要といえる。重要なことは研究者が観察結果を批判的に分析し、解釈することである。近年はこうした方法を用いる研究者が増加してきた。

(三) 観察と情報収集

つぎに観察と情報収集について説明したい。⁽⁵⁾

観察 (observation) は参与の瞬間に始まる。初期の、焦点をしばらない観察 (unfocused observation) においては、内部者の世界になじみ、以降の観察とデータ収集をスムーズに運ぶことが目標となる。このために研究者は現象に対して開かれた態度で接することが必要である。新しい状況のなかで、空間の物理的特色を明らかにし、人間の性別や年齢を知り、さらに社会的ステイタスや配偶者の有無などを読みとる。観察を通じて状況のイメージを固め、焦点をしばった観察 (focused observation) に移行する。焦点をあわせるためには広い範囲から徐々に特定のものに注意を向けていく方法が良い。焦点をしばることによって関与が深まり、非公式的会話や何気ない質問が進行する。参与者の習熟度が深まるにつれてこうした過程はスムーズに進行する。会話のなかでは聴くこと (listening) を中心としてデータを収集すべきである。問うこと (questioning) は話しを継続させ、討議を促進し、会話を方向づけるために有効な手段である。

問題が明確になれば参与的研究者は面接を用いることができる。質問の実施に関しては経験則としていくつかのポイントがある。(1) シンプルなものから体系的な方法へ進む、(2) 研究の紹介は一般的で済ませ喋りすぎない、

(3) 内部者に課題への協力を要請する、(4) 発言の内容を再度述べて相手に確認する、(5) “why” の質問は避けて “how” “what” “when” “where” を尋ねる、(6) 比較 (comparison) と対照 (contrast) の質問を活用する。

非公式面接 (informal interview) は日常会話の自然な流れのなかで行われる方法である。したがって、何について、いかに話題を展開するかという詳細は事前に決めない。内部者との間にラポート (rapport) をつくり、面接への協力的態度を醸成することが狙いとなる。しかし面接の内容は記録として残す。これに対して、公式面接 (formal interview) は構造化された一連の質問を用いて異なる内部者につきつぎと同じような方法で問いかける方法である。それゆえ均質性の高いデータを体系的に生み出すことが可能となる。このためには、研究者が質問の適切性をしっかりと認識していること、対象との間に十分なラポートがあることが必要である。したがって公式面接はフィールドワークの後半に実施する。アンケート (questionnaire) はこうした方式の一種である。参与観察と関連した面接の特殊形態に深層面接 (in-depth interview) がある。これは課題について特に深い知識をもつ人々を対象として行われる。広範な知識をもち、面接に進んで協力する人々をインフォーマントと呼ぶ。深層面接は内部者の生活史 (life history) を探究する目

的で行われる。

以上のほか、さまざまな記録、工芸品などを調査し、情報を入手することができる。また、研究者が会員の資格 (membership) で得た体験は価値ある情報である。内部者の立場で感ずる (feel) ことによってエモーションや感情を知ることができる。

四 分析と理論構築

つぎに情報を分析し理論化するための方法を説明したい。⁽⁶⁾

フィールドにおいて収集されたデータはメモ (note) として蓄積される。メモは整理され、コード化されて、ファイルのなかに納められ、定期的に見直される。こうした作業を通じて問題と事実との関連が明らかとなる。分析方法の要諦はつぎのとおりである。(1)構成要素の観点から現象を知り、分類する、(2)事実間のパターンと関連性を探究する、(3)現象間の比較と対照を行う。データのコードはより大きな単位への分類、選択、組織化、再組織化に続く。これは時間をかけて行われる場合も、一瞬のひらめきで行われる場合もある。データの整理のなかで文献や理論を参照すること、ならびにイメージネーションをみることが必要である。

データの分析を通じて、事実の意味あるパターンの体

系化という理論化の作業が開始される。理論とは説明や解釈による事実の整理である。参与観察に関係した理論化の様式はつぎのとおりである。(1)抽象化 (abstraction) によってデータからの一般化をはかる分析的帰納法 (analytic induction)。これはつぎの四段階より構成される。①事実の本質的特徴の決定、②より一般的である本質的特色の抽象、③一般性の検証、④関数的表現への定式化。(2)感受概念 (sensitizing concepts) (H. Blumer)。感受概念は実際の経験的事例でのヒントや示唆によって経験世界の一般的特色を明らかにする役割をはたす。これによって研究者は現象の独自性と関係を知る。概念は経験を通じてテストされ、改善され、精練される。研究者は理論的アイデアが、いつ、どこで、どのように、どの程度まで妥当かを日常生活の世界のなかで検討する。(3)参与観察での理論の帰納的構築をはかるグラウンデッド・セオリー (grounded theory)。これはつぎの四段階より構成される。①さまざまなカテゴリでのデータのコード化、②概念的カテゴリの統合、③新しい理論の特定化、④理論の完成。(4)実存的理論化 (existential theorizing)。研究者の実存的所在によって観察内容を検討する方法である。常識を真理的方法的基盤と考え、直接観察と体験によって解釈的一般化 (interpretative generalizations) を形成する。データ

の吟味と分析においては集団討議を行う。(5)記述と解釈的理論による解釈学 (hermeneutics)。人間は歴史性をもつ特定の生活様式を経験することを前提として、テキストとしての生活様式について問うことで解釈的一般化をはかる。研究者とテキストは歴史的に位置づけられたものと考え、普遍的パターン、規則性、あるいは法則を志向しない。

注

(1) D. L. Jorgensen, *Participant Observation*, Sage Publications, Inc., 1989.

(2) 拙稿「聴く」ことの理論と方法―社会現象の解釈学的探究―(神奈川大学国際経営フォーラム、第二号、一九九一年三月)。

(3) 本節の説明はつぎのものに基づく。

D. L. Jorgensen, *op. cit.*, Chap. 1.

(4) 本節の説明はつぎのものに基づく。

D. L. Jorgensen, *op. cit.*, Chap. 4.

(5) 本節の説明はつぎのものに基づく。

D. L. Jorgensen, *op. cit.*, Chap. 6.

(6) 本節の説明はつぎのものに基づく。

D. L. Jorgensen, *op. cit.*, Chap. 8.

四 対話の方法

(一) ロゴスの側面

つぎに、現象に参与し、情報を収集することによって生きた意味を捉えるための方法論を対話 (dialogue) を中心に説明したい。

哲学の歴史における「対話」は古代ギリシャに始まり、Platonの師 Sokratesの対話が今日に伝えられている⁽¹⁾。ギリシャ語における対話を意味するディアロゴスは、ディア(分ける、分有する)＋ロゴス(言葉、論理)を表わし、対話に参加する者が互いに言論を分け合い、真理を共同的に探究することを意味した⁽²⁾。中村雄二郎によれば、ロゴスを分け合うこと、ならびに問題自身のロゴスに導かれて展開すべきことが「対話」の基礎的要件である⁽³⁾。Sokratesの問答法について金子晴勇はつぎのような特色を指摘した。(1) 自他を批判検討する吟味の精神によって展開する。人間は合理的な質問に対し合理的に答えることができる理性的存在であることを前提に、問答法は一問一答形式で議論を組み立てる、(2) 教師が弟子に対し、話しかけ、弟子が知識を生む手助けをする「産婆術」である、(3) 勇気、節度、敬虔、正義、恋、美などおもに倫理上の問題を扱ってことばの意味を確立する、(4) 問われている相手が自覚しないまま所有している真理を明らかにすること、つまり物の歪んでいない統一なる形姿(イデア)を観照することへと導く方法である⁽⁴⁾。また、田中美知太郎は問答法を「長い議論を寸断して、途中の一步

一步に相手が口を入れることを求め、その賛否を確めながら相手と共同して議論をする方式」とした。そして、ギリシャらしいの哲学には、このように思考の一步一步を明確にし、その間で手を抜いたり、飛躍を求めない伝統があることを指摘した。⁽⁵⁾

このように「対話」は西欧における知の方法論の基礎であり、演繹や帰納とならぶ真理探究の方法といえる。また同時に教育手段としての意味合いをもつといえよう。島崎隆の研究によれば、対話はレトリックと共に、知の流動化・相対化、またはその奥にある知の人間化とも称される特色を有する。これは、知識がけっして超歴史・超人間的なものではなく、論争、合意およびレトリカルな説得の産物であることを意味している。また、対話を、ディスカッション、レトリック論、宗教的かつ神秘的対話に類型化することができる。⁽⁶⁾

本稿では、情報（知識）や真理を生産する目的で行われる二者以上による言語を中心とした相互作用を「対話」と考え、創造的対話を実現するための条件について考えていきたい。

対話行為が言葉に依存することは定義より明らかである。金子晴勇は対話的に語ることの難しさをつぎのよう表現した。「賢明な人は現在の微妙な一瞬のなかにその人に向向しているものの本質をとらえて自分の言葉で

個性的に表わすことができる。しかし、平凡な人は、ただとどく外国語をあやつるように、ありきたりのきまり文句をさがしてきて、事がらにそれを当てはめることに気をとられてしまう。だから人間の語る言葉は現在の状況の意味を自分の言葉でひきとり、それを新しい生命に生きかえらすのではないならば、語られた瞬間にもう死んだ言葉になっていく。⁽⁷⁾ 生きるとは状況の意味を自分の言葉で解釈し、表現することである。言葉は人間への貴重な賜物であるが、それをいかに生かしていくかは真に対話的思考の課題である。⁽⁸⁾ 同時に、言語を形成する力は思考を形成する力であるとの考えが西欧には根強い。⁽⁹⁾ 精神医学者である神田橋條治は、ヒトは生体とコトバ文化の併存を生きることによって人になると述べ、精神療法における対話のポイントはコトバ文化の共有をはかろうとする治療者の姿勢にあることを指摘した。⁽¹⁰⁾

また、宗教的かつ神秘的対話のなかでは、語ることに等量の沈黙を対置することによって対話の言葉は意味をもつといわれる。⁽¹¹⁾ それは M. Buber の著作⁽¹²⁾ に代表される。彼によれば、いかに熱心に語りあっても、それだけで対話は成り立つものではない。対話は伝達される、あるいは伝達され得る内容の外側で成就し、人間生活とその具体的な時間継起にかたく結びついているひとつの事象のうちで成就する。したがって、対話には音声も身振りも

必要でないことがある。彼の思想は、意思伝達から霊的まじわりへの変化を対話の本質と捉え、「感得」と名づけられる知覚を基礎に成立する特色がある。したがって、究め得ぬ実在との深みにおける交流を意味し、観念論的理解や、実利主義的立場は厳しく戒められる。Ruberは演繹し得ぬかく在る存在としての魂の感得に対話の本質を見いだした。金子は、禅の「不立文字」の思想にも似たこうした沈黙のうちに語ることに、あるいは沈黙についての深い理解はヨーロッパ精神史の源泉に示されており、それは神の表象と結びつくことを指摘した¹³⁾。神田橋條治は、われわれは日常、言葉が濃縮された情報を伝達しているように感ずるが、言葉それ自体は貧しい情報であって、より原始的であるもの、たとえばイメージの働き、行動・振る舞いなどが実は情報性に富み、最も情報量が大きいものは雰囲気であると述べた¹⁴⁾。

(二) 非ロゴスの側面

つぎに対話の非ロゴスの側面を中心にさらに考察を進めていきたい。

有馬道子は人間が生きているということは解釈を続けることであると述べ、解釈における知と愛をテーマとして「よくわかることはよく愛することであり、よく愛することはよくわかること」とした。そして、「よくわかるこ

との前提は、よくきこえること・よく見えること、よく感じられることである」と指摘した。そして、解釈に熟達するためには、よき観察者であること、ならびにデリケートな感性を必要とすることを説いた。また、ものごとを本当に奥底まで共有して生ずる感情は「あわれ」と呼びうる哀しみの情であるとも述べている。そして、解釈はつぎの三つのバランスで決まることを明らかにした。

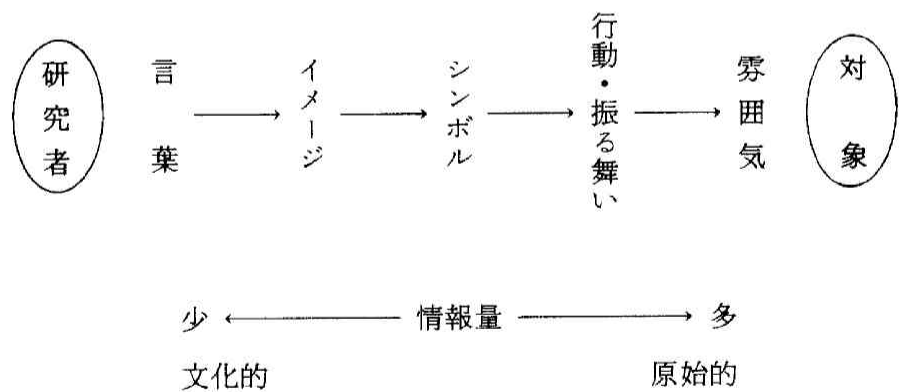
① コンテキスト依存性（主として社会性）志向、② コンテキスト・フリー性（主として知性）志向、③ イコン性（主として感性）志向。成熟した解釈とは、各類型における高度の志向能力、各類型の志向度間のバランスのよい発達、類型間の相互移行性と各類型における志向度の自在な調整、を意味する¹⁵⁾。

また、精神医学者の中井久夫は「ひとびとの試みにおいて、いつつ土に字を書く」というイエスの治療法について、つぎのごとき興味深い指摘をおこなった。「これは、問いかげに対決するのでもなく、屈従するのでもない、第三の姿勢である。聴くという態度を端的に示しつつ、問いかける者をおのずと再考と鎮静に導く行為でありうる¹⁶⁾。これは、非対話による対話という禅問答の深みに共通した内容を示唆している。同時に、中井はイエスの「手をふれる」という治療行為に関連して、「人間の相互作用というものは意識のシキイの下で非常に多くのこと

が行われている」と述べた⁽¹⁸⁾。このように、相互作用としての対話は、身体的接触を含め人間の五感のすべてを使うことによって感じとるものであることが明らかである。身体による認識、観念ではなく馴染むことの重要性は日常体験のなかで多くの碩学が指摘する教訓である。現実はお互いの間に⁽¹⁹⁾空気が動き呼吸が往き来してこそ認識できるものである。

既述のように、精神医学者の神田橋條治は「情報」に關して示唆に富む独自の指摘をおこなった⁽²⁰⁾。その内容はおおよそ図8のように要約することができる。彼は対話を効果的に展開するためのつぎのような原則を指摘した。(1) 雰囲気をつかむ、(2) ノン・バーバル (non-verbal) な要素 (行動・振る舞い・声の調子・感情・身体的接触) を使う、(3) イメージを使う、(4) 言葉を使う、(5) 原始的要素 (身体に長期間かかって蓄積されたもの) に注目する。このほか、つぎのごとき対話の要諦を神田橋の研究から抽出できる。(1) あれやこれやの位置に自分を置いてイメージ能力を磨く、(2) 「離魂融合」のイメージによって話を聴く、(3) 「因果律」にとらわれない、(4) 雰囲気の流れに沿って進行する、(5) 瞬間の師弟関係を大切にす、(6) 相手の人生への責任感が密かに流れる人間関係を築く。神田橋は人の成長における統合の理想像を混沌とゆらぎに求めた。かかる状態は「けっして弛緩したありよう

図8 対象への距離と情報量



(注) 神田橋條治『精神療法面接のコツ』岩崎学術出版社、1990年の記述に基づき筆者が作成した。

ではなく、微かな刺激が加わると一瞬にして反応がおこる過飽和の気体に準えられるような、静かに張りつめた「雰囲気」の混沌である。そのためには、意識のなかで、育てられる自己と、自己を育てる自己分裂が必要であり、種々の行為や姿勢を「知りつつおこなう」あるいは「実験と違って」してみることが良い。混沌とゆらぎによっ

て、価値規範や構造の崩壊と内容物間の境界の溶融、ならびに時間・空間の枠組みの消滅がおこる。神田橋によればこれを促進するポイントはつぎのものである。(1)コトバを話し言葉に戻し、そのなかに含まれた鳴き声などのプレ・バーバルな要素に着目する、(2)コトバの背後の含蓄の世界を知る、(3)「導きの理論」と「規制の理論」を識別する、(4)哲学する姿勢をもつ。

このように、相手とのコトバ文化の共有をはかりながらも、そこにとどまらず、雰囲気我代表される対象に最も近い要素を感得する工夫が必要といえる。混沌のなかでの体験による一瞬の理解はゲシュタルト転換と呼びうるものである。対話による理解は対象のなかに答えを求める様式ではない。むしろ、研究者の深い内省が答えを導くと考えるべきであろう。金子晴勇は人間と人間との「間」の領域が対話的状况の特色であると指摘した。そして「人格とはそれ自身のうちに行為の中心をもちながらも、他者との関係のなかで自己を実現している存在である」と述べた⁽²¹⁾。研究者が身体を移動させ観察しながら、また、さまざまな視点でのイメージを働かせながら、対象との共同行為によって自己の内面を吟味し、理解を創造することが対話の本質といえよう。

注

- (1) 田中美知太郎(編)『プラトニ』中央公論社、一九

六六年。

- (2) 島崎隆『対話の哲学』みずち書房、一九八八年。中村雄二郎『哲学入門』中央公論社、一九六七年。
- (3) 中村雄二郎、前掲書。
- (4) 金子晴勇『対話的思考』創文社、一九七六年。
- (5) 田中美知太郎、前掲書、一八〇～二〇〇ページ。
- (6) 島崎隆、前掲書、二一〇～二二一ページ。
- (7) 金子晴勇、前掲書、四三ページ。
- (8) 金子晴勇、前掲書、四七ページ。
- (9) 金子晴勇、前掲書、四八～五〇ページ。
- (10) 神田橋條治『精神療法面接のコツ』岩崎学術出版社、一九九〇年、第五章。
- (11) 金子晴勇、前掲書、第九章。
- (12) Martin Buber, *ICH UND DU, ZWIESPRACHE* (田口義弘訳『我と汝・対話』みずち書房、一九七八年)。
- (13) 金子晴勇、前掲書、二一七ページ。
- (14) 神田橋條治、前掲書。
- (15) 有馬道子『心のかたち・文化のかたち』勁草書房、一九九〇年。
- (16) 中井久夫『治療文化論』岩波書店、一九九〇年。山形孝夫『治療神イエスの誕生』小学館、一九九〇年。
- (17) 井筒俊彦稿「対話と非対話―禅問答についての一考察―」『思想』、岩波書店、一九七九年一月号。
- (18) 中井久夫、前掲書。

(19) 水上勉・広中平祐『素心・素願に生きる』小学館、

一九八九年、二〇〇ページ。

(20) 神田橋條治、前掲書。

(21) 金子晴勇、前掲書、第四章。

五 むすび

一九七〇年代後半からニュー・パラダイム・リサーチは客観性に重きを置いた伝統的研究の枠組みと素朴な主観性を見方を総合した客観的主観性の方法論に着手した。伝統的研究は人間を社会的文脈から切り離して操作的変数として扱う問題点がある。これに対して、臨床心理学、現象学、エスノメソドロジー、組織行動論、哲学などをルーツとした新しい学問のあり方が探究された。研究は存在、思考、プロジェクト、エンカウンター、意味理解、コミュニケーションのサイクルを経て進行し、研究者と対象との関係によってつぎの類型を指摘できる。①純粋基礎研究、②実存的研究、③アクション・リサーチ、④参与的研究。体験的研究は研究者が対象と体験を共有することによって相互作用のなかから考察を行う方法である。そして、研究に関係した人間が互いの体験と行為を尊重し、共同的(互恵的)関係を維持、発展させながら研究を進行させる。その結果、つぎのような知識が生成される。①命題知、②実用知、③体験知。サイエンスの

思考は現象の意味を探ることにはなかった。体験的方法は間主観性の解釈という課題をもつ。参与的研究は純粹基礎的研究と応用的研究に分類できる。内部者の声の聴取に徹底した民俗誌的アプローチ(Eモード)と、問題に対する診断と解決を特徴とした臨床的アプローチ(Cモード)がある。ニュー・パラダイム・リサーチの知の方法論はつぎのような特質をもつ。(1)研究者と対象の互恵性を基礎に人間についての知識を探究する、(2)主観性と客観性の総合を目ざす、(3)状況の個別性に重きをおく、(4)文脈のなかの人間を丸ごと捉える、(5)人間をモノではなくヒトとして理論化する。

消費体験を実存的現象学の方法で洞察し、体験の生き・た意味を知るマーケティングの試みが展開されている。実存的現象学は非二元論の立場で人間を考察し、体験を一人称によって記述する特色があり、コンテキストならびにホリスティックな視点を重視する。その方法的基礎はゲシュタルト心理学と臨床実践にある。デカルト流の合理主義の伝統は心身二元論の哲学によって対象を機械と仮定し、数学を中心とした公式の言語体系、因果法則、分析、還元主義などを中心として、客観的方法、コンテキストとの分離による三人称の記述を進める。一方、実存的現象学は、体験の志向性、自然な対話、テキストの解釈を中心として、コンテキストを前提とした体験の理

解をはかる。そのために現象学的面接が用いられる。面接では、被面接者の事前の同意と秘密の保護をはからなければならぬ。また、被面接者が非指示的に、自由に体験を説明できる環境を整備する。被面接者の体験を焦点とするため、回答者を専門家と考えることが効果的である。そして、できるだけ具体的な出来事にポイントをしぼって対話を進行させる。質問は記述的内容を引きだすことを中心とし、回答者が合理化や防衛的反應を示す恐れのある質問は避ける。とくに「なぜ(why)」という問いは回避しなければならぬ。発言内容を録音し、文字に移す。これをテキストと呼ぶ。テキストの解釈は回答者の言葉に即して行う。また複数の人間が解釈にあたり、互いに内容を討議し、確認することが望ましい。こうした作業によって体験のなかの共通パターンを発見する。

社会学の研究によれば、課題がどのような特色をもつ場合に参与観察を応用できる。(1)既知の内容が乏しい、(2)内部者と外部者で見解に相違がある、(3)現象が外部からは分りにくい、(4)現象が表面に現われていない。参与観察の方法的特色はつぎのとおりである。(1)内部者の視点で観察する、(2)日常生活の世界を対象とする、(3)解釈と理解をポイントとする、(4)具体的状況や背景を探る、(5)ケース・スタディを行う、(6)フィールドに参与し相互作用を体験する、(7)直接観察、記録の収集、インフォ-

マントなどから情報を集める。研究者の身体的ならびに社会的所在が観察内容を決定する。それらは現象へのパースペクティブを与える。しかしそれぞれが内在的限界やバイアスをもつため、研究者は異質な視点の探究に不断の努力を払わなければならない。参与者の位置は完全な外部者から完全な内部者までの連続体のうえにある。観察内容は関与の程度に応じて変化する。外部者として参与することによって現象を概観し、主要な特徴、関係、パターンの発見が可能となる。研究者の身分を明らかにして参与する際には、できるだけ長期間、もしくは頻繁にフィールドと接触して自然な様子を探る。また、外部者として参与しながら内部者の問題に深く関与する場合には、専門家として内部者に助言を与える。人間の体験にかかわる深い意味は日常生活に同じ立場で参与することによってはじめてつかむことができる。参与が深く進むと「現象になる」という段階に至る。研究者は現象を実存的に体験し、内部者の立場と研究者の立場を自在に往復できることが必要である。

観察はフィールドと接触した瞬間に始まる。焦点をしぼらない観察から始めて、徐々に注意を集中し、観察すべき対象の発見に努める。焦点をしぼることによって対象への関与が深まり、何気ない会話や質問が進行する。会話は聴くことを中心に行い、問うことは話題を進展さ

せるための方策と位置づけるべきである。研究課題の輪郭がはっきりとすれば面接を開始する。非公式面接は話題の細部を決めることなく行われる自然な日常会話を中心とし、内部者とのラポートの形成が狙いである。しかし内容を記録として残すことが必要である。公式面接は異なる内部者につきつぎと行う構造化された一連の質問であり、フィールドワークの後半で実施すると効果が高い。豊富な知識をもち面接に進んで協力するインフォーマント（情報提供者）を対象に深層面接が行われる。深層面接では内部者の生活史を探究する。エモーションや感情は内部者になってはじめて本質を知ることができる。フィールドにおいて収集されたデータはメモとしてまとめられ、コード化されて、ファイルに整理され、定期的見直しが行われる。データの理解のなから、事実の意味あるパターンと体系の構築という理論化が始まる。理論化はつぎの様式を含む。①分析的帰納法、②感受概念、③グラウンデッド・セオリー、④実存的理論化、⑤解釈学。

対話はロゴスを分け合い、真理を共同的に探究することを意味する。西欧にはこうした方式で思考の過程を着実に固め、論旨を展開するギリシャ以来の知的伝統がある。それは哲学および教育法として日常生活に深く根をおろしている。哲学者の指摘から、対話が言葉に依存し、

生きることは状況の意味を自分の言葉で解釈し表現する行為であることが分る。したがって、言葉を共有化することは対話の基礎要件である。宗教的かつ神秘的対話のなかに、語ることに等量の沈黙を対置することで言葉は意味をもつという含蓄ある指摘がある。言葉が伝える情報量は限られており、イメージ、行動・振る舞い、雰囲気などによってずっと大量の情報伝えられる。したがって、対話ではロゴスの側面と非ロゴスの側面の両方に注意を払うことが必要である。解釈は知性ととも感性や社会性に規定される。また言葉を交さない「非対話」のなかに対話の本質を含む場合がある。さらに身体を媒介とした対話を考えなければならぬ。このように対話は人間の五感のすべてによって感じとるものであり、頭と同時に身体、観念と同時に馴染むことの重要性を指摘することができる。かかる領域は精神医学において深く研究されている。そしてつぎのごとき対話のポイントを指摘できる。①自分の位置を変化させることによるイメージ能力の錬磨、②離魂融合、③因果律からの脱皮、④雰囲気の流れ、⑤瞬間の師弟関係、⑥相手の人生への密やかな責任感。精神医学者の研究によれば、人の成長における統合の理想像は混沌とゆらぎにある。このために育てられる自己と、自己を育てる自分への分裂が必要である。このように対話による理解の本質は対象との相互

作用のなかで変化していく研究者の深層への自己洞察にある。かかる発見は、研究者の現象への関与、ならびに対話者への柔軟で誠実な態度に依存する。すなわち、良き対話の実現のためには研究者の解釈への意志が最も重要であると結論できる。

(一九九二、六、三〇)

(たけい・ひさし／経営学部助教授)